

身体と時間をめぐる象徴とその政治的次元―歴史民俗資料学の視点

おのち たける
小野地 健 (神奈川大学)

発表者は厳密には文化人類学専攻ではない。歴史民俗資料学専攻である。神奈川大学歴史民俗資料学研究科は、歴史学や民俗学等の枠を越えて、巨視的な観点から相互の研究を吸収しあい研究を展開することを大きな目的としているが、もとより発表者は、その壮大な課題に答える能力はない。しかし、この課題に少しでも向き合うためには、改めて文化人類学の基礎的な理論を掘り起こしながら、問題の視点を広げ解釈を膨らませることで、それぞれの学問的蓄積をリンクし、ともに考えていく足がかりを創っていくことが必要と考える。この問題意識に基づき、社会史、民俗学の成果に対して、文化人類学の理論を適用し、再検討していく。

本発表では、今では古典となった E・リーチ、R・ニーダムらの象徴人類学を用い、小田亮等の近年の構造人類学の知見を取り入れて伝承や説話を再検討し、構造と論理を読み解く。また、発表者の使用している政治性という言葉は、ポストモダンの文脈ではなく、人間の文化秩序が無根拠であり(ゆえに解釈に開かれている)ことから不可避免的に発生する、解釈をめぐる競合性や方向性を指す意として用いる。

そして、博士論文で分析した諸問題のうち、八百比丘尼伝承、日招き伝承を通した時間論と、虹と市の問題を中心に発表を行う。

八百比丘尼伝承…人魚の肉を食べた女性が不老不死又は異常な長寿となり、やがて比丘尼となって各地を放浪する伝承である。これをタブーと排除による時間論として分析する。近代的な時間は数量的不可逆的に流れ去るが、前近代的な時間は秩序に従って人生儀礼を経ることで、階梯としての時間カテゴリーを進み死へと辿り着く。ゆえに人魚を食いカニバリズムのタブーを犯して秩序から逸脱した八百比丘尼は時間を順調に進むことが出来なくなり、年をとれず死へも移行できず、社会から死を奪われるのだ。

日招き伝承…日を招くモチーフを持つ伝承を、ここでは日招き伝承と呼ぶ。これには日招き長者のように日を招いた人物の没落を語るものと、合戦の最中に日を招き戻した武将が勝利するという二つのパターンがある。日招きは時間を分節し支配する行為であり、ゆえに日招きの正当性を様々な要素が競合し、その要素が正当とされれば成功・勝利をもたらし、非正当とされれば没落という差異が生み出されるのだ。

虹と市…虹の立った所に市を立て、売買を行うという不思議な慣習が日本古代、中世に散見される。虹は関係性が過剰であることの象徴だと指摘できるが、一方、市は市場交換という、関係を絶えず清算する交換行為であり、贈与互酬性を常とする社会では恐れられて排除され外部化する。「虹が立った所に市を立てる」という論理とは、関係性の過剰としての虹の発生に対し、関係を清算し断ち切る市場交換の場である市を作り出すという行為を対応させ、自然と文化の間に適正な距離を作り出すものなのだ。

以上が発表の要旨である。

タイ北部山地カレン社会におけるエコツーリズムの民族誌的研究

須永 和博 (立教大学)

第三世界の熱帯林は、植民地主義から今日のグローバリゼーションにいたる歴史的過程のなかでさまざまなかたちで資源化されてきた。熱帯林には、木材の「合理的」産出を目的とする科学的フォレストリーの視線や、「原生自然」の保護に絶対的価値をおくエコツーリズムをはじめとする環境主義の視線、生物資源とその知識を手に入れようとするバイオテクノロジーや遺伝子工学の視線といった多種多様な視線が注がれてきた。そしてそれらの熱帯林に向けられた視線は、現地の人々の多様な「生」と交錯し、衝突しながら、森から生活の糧を得る人々の生活に大きな影響を及ぼしてきた。熱帯林とは、植民地主義や国家、グローバリゼーションなどの権力作用のなかで多様な視線が注がれると同時に、それに対する地域住民の抵抗や協働、コンフリクトを含むさまざまな文化的・社会的実践が生起する社会空間、メアリー・ルイズ・プラットの言葉を借りれば「コンタクト・ゾーン」である。

近年、このような熱帯林の資源化という問題を考える上で、エコツーリズムという現象は重要な位置を占めるようになってきている。今日エコツーリズムは、経済開発と自然環境の保全の両立を目指す「持続可能な開発」の一形態として、第三世界におけるナショナルかつグローバルな開発戦略のなかでヘゲモニックな言説となりつつある。特に農林漁業などの一次産業の代替産業としての期待から、新たな「自然」の資源化としてエコツーリズムが外貨獲得のための開発戦略として注目をあびるようになってきているのである。

こうしたエコツーリズム開発においては、自然環境のみならず、先住民をはじめとする自然と深く関わる人々の生活文化もまた資源化される。1980 年代後半から、環境主義の言説のなかで、従来「無知な森林破壊者」として描かれてきた先住民らの「土着の知恵」が、科学技術や知識に対するオルタナティブとして積極的に評価されるようになってきた。こうしたなか自然環境とともにそこに暮らす地域住民の生活文化もまた、エコツーリズムの名のもとに資源化されるようになってきたのである。こうしたエコツーリズムという森の資源化は、先進諸国の環境主義者と世界システムの周辺地域の人々の結びつきを生み、それは一方では中心から周辺への圧倒的な影響力をもたらすものであるが、他方では近代の言説によってこれまで周辺化されてきた人々が自らをエンパワーする契機ともなりうる。

以上のことを踏まえた上で、本論文は、タイ北部の山地民、カレン社会におけるエコツーリズムという現象を題材としながら、森林資源の開発や利用をめぐる生起するさまざまなアクター間の交渉、調整、協働といった文化的・社会的実践について考察することを目的としている。

Local Identity in Contemporary Japanese Society:

Modern Times and Local Culture of ‘Historic Town’ Ishioka

Hyeon Jeong, Kim (Tsukuba University)

This paper examines the significance of local identity in contemporary Japanese society by dealing with the case of Ishioka city. This city situated in the middle of Ibaraki prefecture has been selected as the Historic Town of Ibaraki in 1983. This study discusses why Ishioka people try to emphasize on local HISTORY and CULTURE as explaining about Ishioka by analyzing what and how they talk about related to it.

日常実践から見た巡礼に関する文化人類学的研究 —四国遍路における接待を事例として—

浅川 泰宏 (慶應義塾大学)

本研究は、これまで非日常的な宗教的实践とされてきた巡礼を、日常実践という視点で捉え直すことで、新たな文化人類学的巡礼研究の領域を開拓することを目的とする。

近年、文化人類学で議論されている日常実践の概念は、P.ブルデューのハビドゥス等から田辺繁治らによって発展的に構築され、ルーティン化された暗黙的・慣習的行為と規定されている。これは、「文化」や「民俗」がア・プリオリなものではないとする、いわゆる言語論的転回以降の思想的立場と響き合うものであるが、こうした知見を踏まえるとき、「巡礼」もまた、再考を余儀なくされる。

巡礼は、ある宗教的理念に基づく聖地への旅である。そのため巡礼は非日常的な宗教的实践と理解され、本質論的解釈や一元的理解へと傾向づけられていた。特にそうした言説に回収されがちなのが、「接待」と呼ばれる巡礼者歓待の慣習である。接待は、主に巡礼地周辺の人々が巡礼者に対して金品等は無償施与する行為である。これが巡礼者への経済的・精神的援助の側面を持ち、時に巡礼体験に大きな影響を与えるが故に、その動機として、大師信仰や善意、愛、同情など美的に捉えられた四国の人々の「心性」がしばしば読み込まれてきた。だが、四国の地域社会では、時に巡礼者は恐怖や忌避の対象として言及され、接待も大師信仰の具現化として主体的・能動的に行われるのみならず、巡られることによって身体化された暗黙的・日常的な実践の側面もあることが語られもする。

このような2つの言説のズレを目の当たりにするとき、「人びとはいかに語り、思考し、行為することによって日常実践を遂行しているのか」という、日常実践が射程化する問題群は示唆的である。そこで本研究では、巡礼現象の多義的理解のために、巡礼を「巡礼者という特殊な意味性を付与された他者を送り込む装置」と理解し、まなざしの交錯する「接待」に焦点を当て、巡礼者側ではなく地域社会の側からの考察を通して、彼らが巡礼に関する認識・行為・解釈をどのように接続し、ひとつの物語を形成していくのかという問題にアプローチする。

議論の中心となるのは、巡礼者を「語り分ける」認識の民俗である。中でも注目したいのが、信仰の希薄さ、不衛生さ、強欲さ等のネガティブな意味性を付与される「ヘンド」という異人である。彼らは「本物」の巡礼者とされる「オヘンロサン」に対比する形で語りの中に登場し、乞食概念に引きつけられながらも、時に巡礼者概念に引き戻されるという、認識と解釈のゆらぎが顕著に表出する両義的存在である。本発表では、このような複雑なまなざしの力学を持つ巡礼者認識の構造を、フォークタームのレベルから解きほぐし、その解釈の揺らぎのメカニズムを説明する。

対話とエスニシティ —首都圏におけるアイヌ民族の文化・社会運動の日常性—

関口 由彦 (成城大学)

1960 年代に開始された首都圏のアイヌ民族の文化復興・権利回復運動において、首尾一貫した運動の論理の世界とその背後に確かに存在している流動的な生活世界とが切り離されつつ併存していることを示し、生活世界における実践、エスニシティ、人と人とのつながりのありようを明らかにすることが、本研究の目的である。抑圧された人々が論理世界と生活世界を「切断」しつつ往復することで現実変革を試みてきたことの裡には、構築主義と戦略的本質主義のジレンマを乗り越える鍵がある。そのジレンマとは、構築主義が現実の権力関係や暴力の存在を隠蔽してしまうことを批判する戦略的本質主義の言説が、対象を「弱者」等の一枚岩の同一性をもったカテゴリーに閉じ込めてしまうという問題をもつというものである。これに対して本研究は、本質主義の論理世界と流動的な生活世界とが切り離されつつ併存している現実を描くことで、権力関係や暴力の存在を明示する本質主義の論理が必然的に人々の柔軟な生活実践を抑圧するものではないことを明らかにしたうえで、抑圧された人々が現実変革のために本質主義的な言説を用いることを肯定する。それと同時に、本研究は、流動的な生活世界を描くことで、対称を固定的なカテゴリーに閉じ込めることを避ける。

本研究は、運動を担う人々の生活実践や、排他的二分法に拠らないエスニシティのあり方、対話的關係性といったものに注目することによって、運動が内包する日常的な流動性のありようを描き出す。彼(女)らは、決して超越的な視点から周囲の状況を意味づけ、主体的選択によって運動に携わってきたわけではなく、それ故に日常的主体としてその都度の生活の状況の固有性に適した柔軟な運動の実践が可能になったのである。また、流動的な生活世界において知覚されたエスニシティは、多様な経験の固有性を付加されることで、境界を明確に定義されたカテゴリーにはなり得ない。それは、排他的二分法に基づくエスニシティの構築を主張する非-実体論が看過する次元であり、超越的視点を前提としない日常的なエスニシティのあいまいな構築を指し示す。

そして、このような流動的な日常性に接近する方法として、本研究は、ミハイル・バフチンのいう「対話」として捉えられたライフストーリー・インタビューを採用した。それは、超越的な視点から固定された「他者」を理解することではなく、他者の「間近に」身を置くことによって、生活世界における経験の固有性を帯びた他者の異質性を了解することである。「対話」的關係性とは、お互いを、矛盾を抱えながら常に生成変容しつつある他者として、一義的に把握し得ない全体性において捉えようとする関係性である。このような他者の了解の仕方は、生活世界における固有の経験の未完結性を露わにする。

重層的世界におけるジェンダーの再編と自己の再定義 ーパキスタン人ムスリム移民の妻たちー

工藤 正子 (東京大学)

本論文は、1980 年代に来日したパキスタン人ムスリム男性と結婚をし、イスラームに改宗した日本人女性が、自らを取り巻くジェンダー関係や「ムスリム」としての自己像を再編していくプロセスを、主に関東圏における 40 名の女性たちからの聞き取りやモスクでの参与観察から得られたデータをもとに論じたものである。

来日出稼ぎ男性が急増するなかで、彼らと出会い、結婚した日本人女性たちは、自社会を基盤とする生活において、ジェンダーや国家、宗教という複数の差異の交差点に置かれる。そうした差異の相互作用の様態とその帰結を捉えることを目的に、本論文では、彼女たちの日常で妻・母、或いは嫁・娘としての役割ゆえに形成される重層的な社会関係の在り方に着目する。彼女たちがそこで複数の差異や力関係に制約されつつ、限られた空間のなかで、「改宗ムスリム」として自己の新たな居場所を築き上げようとしていく、その多面的かつ主体的なプロセスを理解することを通し、国境を越えた移動に関わるジェンダーと自己像の再編の理解に貢献することを試みた。

本論文は、序論と結論のほか以下の 9 つの章から構成されている。

第 1～3 章では、議論の背景である結婚までの経緯を論じた。第 1 章では、夫たちの来日移動について考察し、第 2 章では、女性たちが夫と出会い、結婚を決断するまでを議論した。第 3 章では、結婚手続きで要請される妻のイスラームへの入信や、夫の在留資格の取得等が結婚初期の生活にいかに関与したかを明らかにした。

第 4～9 章は、結婚後に女性たちの日常に現われてくる重層的な文脈を個別に論じた。

第 4 章では、滞日長期化に伴うパキスタン人男性のネットワーク形成を、自営業への移行や「イスラーム」的空間の出現に着目しつつ論じた。第 5 章では、そうした過程で、日本人女性配偶者たちを媒介に、パキスタンの男女隔離の規範(パルダ)が状況的に再構成されてきたことを論じた。

第 6 章と 7 章は、本論文の核となる部分であり、イスラームの勉強会に参加し始める女性たちに生じる宗教的自己の構築プロセスに着目し、そうした集りにおいて、参加者同士の経験の共有や再解釈を通し、「パキスタンの慣習」でない、「本来のイスラーム」が共同で構築され、「改宗ムスリム」としての自己像が立ち上がる状況を明らかにした。

第 8 章と 9 章では、そうした集いの外側に存在しつつ、ムスリムとしての自己の再編成に影響を与え、更なる変容を促す要因として、トランスナショナルな家族の形成や、日本の地域社会での妻・母役割とそれに伴うムスリムとしての自己の再編成について議論した。

結論では、女性たちの日常に構成される重層的な関係性を総括し、そこで担う多重のジェンダー役割を通じて「改宗ムスリム」であることの意味が絶えず再解釈され、その結果、夫たちへの「同化」か否かという図式に還元できない多面的な変容プロセスが生まれていることを強調した。

身体をめぐるアイデンティティの構築 ーニューヨークにおけるドミニカ系 2 世のダンス実践からー

三吉 美加 (東京大学)

本論文は、ニューヨーク市の若いドミニカ系 2 世を対象とし、彼/女らが身体実践を通して重層的な視点から自己を認識し、独自に文化を捉えるようになっていく様子を記述・考察する。

本論文の中心となるインフォーマントは、2 つのグループに属する人びとである。1 つめのグループ(「バイラドーレス(仮名)」)は、アフタースクールプログラムでダンス学習を行なう参加者である。もう 1 つのグループは、ドミニカ系アーティストたちである。彼/女らの存在は、1 つめに挙げたダンスクラスの参加者のアイデンティティ構築において重要な役割を担っている。

本論文は結論を含め、7 章から構成される。第 1 章では、本論文の目的と問題意識を明らかにし、具体的にどのような問題を検討していくか言及する。第 2 章では、ドミニカ系コミュニティを概観する。まず、インフォーマントによる文化の説明に、タイノ族、黒人、スペインやヨーロッパに関することがらが出てくることについて言及する。引き続き、ニューヨークのドミニカ系社会とエスニック・アイデンティティについての記述を行ない、後半では、現在のコミュニティの若い世代について記述する。

第 2 章から第 6 章までは現地調査をもとにした記述部および議論部である。第 3 章では、ドミニカ共和国の歴史がエスニシティや人種の捉え方にどのような影響を及ぼしてきたかについて考察する。

第 4 章および第 5 章は、ダンスについての記述部である。第 4 章はバイラドーレスの参加者たちがどのような理由でバイレ(伝統的ダンス)を学習し、どのように理解しているのか検討していく。その際、バイレおよびドミニカ文化の理解が変容していく様子をレイブとウェンガー(1994)などによる徒弟制の研究を参照しながらみていく。しかし、インフォーマントの学習が彼らの事例と比べて、学習の目標が多様である点で異なるため、アイデンティティの構築を検証する際には田辺の研究(2003)を参考する。第 5 章と第 6 章では、バイレ学習の経験が日常的な動作にどのような影響をもたらすことになるのかに注意しながらみていく。第 5 章はヒップホップとインフォーマントとの関わりについて考察する。ここでは、ドミニカ系の若者がアフリカ系アメリカ人とともにヒップホップに傾倒したことで、それがバイラドーレスの参加者の意識にどのような影響をもたらしているか考察する。

第 6 章では、若者たちと身体実践の関わりを、彼/女らの言説と身体動作の観察に基づき分析していく。まず「アフリカの」「ドミニカの」などに関する彼/女らの言説を分析した後、バイラドーレスの文化の表現の仕方がアーティストとは微妙にずれること、アーティストの動きや黒人性の認識がバイラドーレスの参加者と異なることについて考える。第 7 章では、ダンスや身体実践、文化の捉え方の類似と違いを明らかにし、筆者の見解を述べる。

アフリカ系オマーン人の人類学的研究 ―「帰郷者」の適応とエスニック・アイデンティティ―

大川 真由子（日本学術振興会／東京都立大学）

本論文は「帰郷者」の人類学的研究を目指すものであり、考察の対象となるのが国際的にもほとんど知られていなかったアフリカ系オマーン人のエスニック・アイデンティティである。アフリカ系オマーン人とは、19 世紀半ば以降ザンジバルをはじめとする東アフリカへ移住し、1970 年以降大量にオマーンに戻ってきた人びとおよびその子孫である。彼らの多くがスワヒリと呼ばれるアフリカ人との混血であり、スワヒリ語の会話能力や知識をもつ。オマーン移民自身による植民地時代、その後のイギリス植民地時代を経て、彼らは東アフリカにおいてある程度の近代＝西洋教育を受け、近代的な生活様式になじんでいた。「帰郷」後は、オマーンの近代化政策推進の中核的な担い手として、また医師や研究者などの専門職として重宝され、社会経済的にも富裕な中間層の一部を形成している。これに対置される存在が1970年以前からオマーンに居住していた者たちとその子孫で、アフリカとの具体的な関わりをもたないネイティブ・オマーン人である。彼らはアフリカ系オマーン人を「ザンジバリー」(字義的には「ザンジバル人」)と呼び、社会・文化的に一段低い、「差別的」ラベルを貼りつけた。

本論文はこうした東アフリカ、オマーン双方で特異な役割を果たしてきたアフリカ系オマーン人に焦点を合わせ、移民活動やネットワーク、文化的適応状況(言語、服装、男女隔離)、アイデンティティの模索、そして両地域における複雑なエスニシティ模様の中での彼らの位置を解明する。とくにアフリカ系オマーン人が他者との関係の中でどのようにエスニック・アイデンティティを構築してきたかという点を、地域的には移民先と本国双方において、時代的には19世紀から現代までという広い文脈の中で議論を展開した。具体的には、ザンジバルにおける対アフリカ人(黒人)とのエスニックな差異化という側面から、19世紀の東アフリカの奴隷制に関与していたオマーン移民の奴隷制に対する歴史認識を取り上げる。さらには1970年以降のオマーン社会において、ネイティブ・オマーン人との関係性の中で「ザンジバリー」という社会カテゴリーがどのように生成・表象されてきたのかを検討し、呼称、系譜、混血といった視点から彼らのエスニック・アイデンティティを分析する。そして最後にエスニシティとナショナリズムというより一般的な視点からアフリカ系オマーン人を考察し、「帰郷者」全体のエスニック・アイデンティティに影響を与える要因は、①祖先とのつながり(血の問題)、②他者による名づけやステレオタイプ化、③経験・記憶、④「帰郷」先の政策・与えられるポジションという、互いに密接した4点であることを示す。

本発表では、オマーンに「戻った」アフリカ系オマーン人を「帰郷者」と位置づける説明からはじめ、博士論文の考察部にあたるアフリカ系オマーン人をめぐる錯綜したアラブ性とアフリカ性の問題について論じたい。

近代産業のなかの北米先住民 —クワクワカワク社会におけるサケ漁業の歴史的意義に関する人類学的研究—

立川 陽仁 (三重大学／東京都立大学)

本論文は、一般に「北西海岸」と称されるカナダの太平洋沿岸部の先住民クワクワカワク (Kwakwaka'wakw、従来のクワキウトル) を対象とする漁業民族誌である。

同地域における広義のサケ漁は、従来の人類学ではほとんど注目されてこなかったテーマである。その結果として、同地域において伝統的生業としてのサケ漁撈から近代的なサケ漁業への移行を通じて、クワクワカワク社会がどのような変化を遂げていったのかが看過されてきた。

人類学史においては、伝統的サケ漁撈と近代的なサケ漁業は連続するものとみなされてきた。つまり両活動とも同じ資源を捕獲するのだから、先住民が後者の活動に適応するのは容易だったはずだというわけである。しかしこれら 2 つの活動は、同じサケを対象とするものの、実際には生産技術、および活動を取り巻く法・経済的問題においては大きな断絶があった。こうした断絶をクワクワカワクがいかに乗り越えようとしたのかという問題が、本論文の主要な論点である。

本論文はⅡ部構成である。第Ⅰ部では、漁業形態の歴史的変遷が記述されている。ここでとくに強調されるのは、1920 年代の先住民へのまき網の認可、および「白人」資本の缶詰工場の建設が、先住民のなかに「ハネ」の活用という技術的適応のみならず、漁船の個人所有 (つまりは漁師としての独立) や企業家の出現という現象をもたらしたことである。

第Ⅱ部では、現代におけるサケ漁業の操業のあり方が記述、分析されている。従来の漁民研究が概して漁民集落の研究に集中しがちであったのに対し、本論文では漁民そのものの記述が試みられる。つまり、漁船を分析の対象とした上で、クルーのリクルート方法や彼らの序列、技能習得のプロセスを描きだすことを通じて視点を「陸から海へ」移行させる試みである。

クワクワカワクのまき網漁船を例にとると、そこには親戚関係を通じたリクルート方法、および船上での徒弟的生活という 2 つの特徴が見いだせる。これら 2 つの特徴は、技術的な面で先住民漁師のサケ漁業への適応を促すことになった。しかしそれだけにとどまらず、彼ら先住民にとってはじめての本格的な「近代」の経験といっても過言ではないはずのサケ漁業を、みずからの「伝統」へと変形させるものでもあった。では、近代的サケ漁業を伝統化させるため、先住民漁師はなにをしたのか。それは操業を「日常化」することであり、海の生活と陸の生活を連続させるということであった。

本発表では、上記 2 つの特徴がいかにしてサケ漁業への技術的適応やサケ漁業の伝統化 (海と陸の連続性) をもたらしたのかという点について論じたいと思う。

「情報」の経路としてのネーション —カナダ西岸先住民サーニッチにおける民族誌的「情報」と「現実」—

渥美 一弥（一橋大学）

本論の目的は、カナダ西部沿岸バンクーバー島南部の先住民サーニッチによるアイデンティティの形成過程を記述し、それに連動した「文化」の成立プロセスを例示することである。これまでの「文化」や「アイデンティティ」という概念は西洋の制度の中にあり、フィールドにおける多様なローカルな状況に対応しきれなくなってきた。そこで、サーニッチが先住民として手に入れる知識の単位を、とりあえず情報として捉え、しかしそれには括弧をつけ、「情報」として捉え直す。その上で、「情報」と「アイデンティティ」の問題を検討する。「情報」は集団を作り、それを社会的に位置づける。この集団形成から位置づけにいたる意識を生み出す背景を「現実」と呼ぶことにする。

本論は八章で構成される。第一章では、アイデンティティ論の変遷と「文化」や「伝統」の現状について検討する。その議論を基に「文化」の成立過程における「情報」について考察する。第二章はサーニッチというアイデンティティを生み出す背景となる状況を検討し、ヨーロッパ人との接触以降に限定してサーニッチの「歴史」を口頭伝承の中から記述する。第三章では、サーニッチに流通する「情報」の具体例として、月の名、地名、個人名の現在について検討する。第四章では、「死」に関する儀礼についての「情報」を例示する。第五章ではサーニッチの祖先が行っていた漁法「リーフ・ネット」に関する「情報」に用いられる時制の問題をとりあげ、集団に対する「想い」が「過去形」によって如何に形成されるか検討する。第六章では、スウェット・ロッジという、他地域の慣習的「情報」をサーニッチが受容し、組み換え、再構成していく様子を記述し、サーニッチのアイデンティティとの関係を考える。第七章では、アイデンティティのよりどころである母語を学ぶ目的で創られたサーニッチのホーム・ページを取り上げ、その完成までのプロセスを記述する。最後の第八章ではサーニッチが属するコースト・セイリッシュ地域の美術作品が製作される様子と、ユーロカナディアン社会の市場で交渉していく二人の芸術家の事例を紹介する。その事例をもとにサーニッチの人々と美術を媒介としたユーロカナディアン社会との関係を考察し、アイデンティティの成立過程を例示する。

本論は、サーニッチの先住民性構築の資料に「情報」という仮称をつけた。神話、地名人名、そしてかつて存在した階層制度や行動規範、今もある社会的差別の経験等に関する「情報」がサーニッチという地域集団の現在を創りだしている。それらの「情報」は受信者によって創造的過程を経る。さらにそれらの「情報」は蓄積され、やがて、その「情報」の流通経路として立ち現れてくるのが、サーニッチが用いる「ネーション」という概念だと捉えることもできる。それが現時点におけるサーニッチの「現実」である。

よりよい介護サービスの実現に向けて —埼玉県秩父郡小鹿野町両神の事例—

駒井 弥生 (埼玉大学)

本研究は、介護サービスが行われている現場で実際に何が行われているのか、問題がどのように生じるのかを埼玉県秩父郡小鹿野町両神の事例をもとに明らかにする。

介護サービスは 2000 年に導入され、画期的な社会システムといわれているが、老々介護、孤独死、介護疲労、介護虐待などという問題は後を絶たない。これまでの介護サービスの議論は、制度自体と医療保険福祉の連携という二つの側面からなされてきた。主に専門家からの視点で、介護を実際に受ける側の声が反映されているものは数少ない。本研究では、介護を受ける側を含め、現場で介護に関わるものの視点から考察を行った。

両神は、高齢者が多く過疎化した山間部で、介護サービスへのアクセスは容易でなく、都市部に比べて行き渡っていない。しかし、高齢者は生き生きと暮らしている。両神の介護の現場を明らかにすることは、今後の介護サービスのあり方を考えるヒントとなる。

両神では、介護を受ける人が持つ疾病や障害は、一般にいう病気とは認識されず、人々の行動パターンから、二つの状態に区別された認識を持つことが明らかになった。一つは他人の目に触れない、身内の援助がある、自己対処可能な材料や知識があるなど、希望に添って自分自身や身内が身体を管理でき、疾病や障害の有無を意識しない状態である。もう一つは、その逆で、疾病や障害の有無を意識する、させられる状態である。ここでは、前者を「内の領域」、後者を「外の領域」として扱った。この原理は、そこにある社会規範すなわち社会的背景に影響されるもので、介護を受ける人以外にも働いている。

本研究では、介護を受ける側、家族介護者、介護を提供する側の人々と、人以外の行政(介護サービスの施策に関連するため)のそれぞれにおいて、介護サービスの流れで重要な判断基準、社会的背景を、「内の領域」と「外の領域」に当てはめた。

結果として次のことがいえる。介護サービスの導入は、①以前のライフスタイルを呼び戻した一お日待ち、講などが場所を代えて復活、相互扶助の再確認一、②家族介護者の介護負担と軽減の両方をもたらした一家族が世話をする風習、家族の勤労形態の変化一、③高齢者の本来の生活(自立した生活)を再確認させた一怠け者ではない、サービスを受ける必要はないなど、身体が丈夫であることを示す必要性一。以上が現場で起こっていることである。そして、介護の問題は、「内の領域」と「外の領域」の悪循環にあった。具体例でいうと、介護を受ける側にとって、家族の援助が受けられるかどうか、介護サービスの流れで重要な判断基準となる。この場合受けられるのが「内の領域」で、その逆が「外の領域」である。介護を受ける側の「内の領域」は、家族介護者には介護負担の増加という「外の領域」となる。このようにそれぞれの関係で複雑に絡み、悪循環となることが介護の問題を生じさせている。

発話行為の多チャンネル性と発話場面における主体のモデル

杉村 洋平 (埼玉大学)

本論の目的

社会秩序がどのように形成され再生産されているかという問いに答えるアプローチの一つとして、社会秩序を形成し再生産する行為の主体のあり方を問題とする。本論では、ことばに着目して行為の主体のあり方を探る。

通常、主体は自己同一性によって保証される人格概念として扱われるが、本論の分析では対面的相互行為においてはむしろ首尾一貫していないことに意味がある。本論の目的は、具体的な対面的相互行為において主体がどのように形成されているか、それはことばの性質にどのように影響されるかを明らかにすることである。

データ

本論で用いるデータは、会話の録音録画データ、およびテレビで放映されたトーク番組と国会質疑応答の録画を文字化したコーパスである。

分析

発話を包括的に分析するために、どのような発話場面でどのような性質の相互行為がどのようなやり方で達成されたかを分析する。そのために、二つの分析概念を用いる。発話が行われている場面を、それを構成する分析的な要素に分ける発話の構成要素と、発話行為のチャンネルである。それぞれ発話場面の状況の性質と発話の内部状況の分析に対応する。チャンネルは、内容、メタ命題、パラ言語、身体動作の四点から構成される。

雑談においては、発話行為の多チャンネル性が発話行為の資源として用いられ、発話者の変更がアイロニーやパンチライン化、再現性という形で、基調を中心に目的や参加参加者など発話の構成要素を維持、再生産している。それは人間関係や社会関係の構築そのものであった。保育園の催しのデータでも発話者の交代がみられるが、このデータでの発話者の交代は式次第を遂行する行為遂行的性格だけを強くもつ。国会の質疑応答のデータでは、発話者の交代は見られない。雑談と制度化状況において、発話者の変更や多チャンネル性の用いられ方に関してこうした違いがある。

これは逆に、発話者の交代やアイロニーや再現性によって明るく静穏な基調を維持ないし再生産し、人間関係や社会関係を確認したり構築したりする場を雑談と呼び、発話自体による人間関係や社会関係の構築が起こらないことによって、情報伝達や行為の遂行が主にはたらく場面が制度化された状況である、と理解できる。

結論

ことばは状況を含めた他の様々なチャンネルとの協働作業で意味を伝える。その主体は自己同一性によって保証される人格ではなく、多チャンネル性を保持したまま全体で一つの意味を伝える主体である。

多チャンネル性やそれに基づく発話者の交代によって、雑談では人間関係や社会関係が維持され再生産される。一方制度化状況では議事や式次第など場面ごとの相互行為が達成される。つまりいずれにしてもこうした発話には、本質的に複数の発話者が存在している。以上

動物をめぐるポリティカルエコノミー—先史 Tiwanaku 社会の動物考古学的視点から—

清家 大樹 (埼玉大学)

本発表では、先スペイン期アンデスの先史 Tiwanaku 社会における動物利用について、動物考古学の立場からその可能性について論じることが目的である。そして社会の動態と動物利用との関係を考察するために、ポリティカルエコノミーの視点を用いる。

データは、Tiwanaku 遺跡とその周辺遺跡の動物骨の分析結果を用いた。また、アンデスのポリティカルエコノミーにおいては、互酬(Reciprocity)、再分配(Redistribution)、競争的フィースティング(Competitive Feasting)、トリビュート(Tribute)、交易(Trade)が重要であり、それらを踏まえて考察を行う。

先史 Tiwanaku 社会はボリビアのティティカカ湖の南東岸に位置する Tiwanaku 遺跡を中心とした国家段階の社会である。先史 Tiwanaku 社会の中心地はアルティプラノと呼ばれる高原に位置し、農業、牧畜、漁撈を生業としていた。また、温暖で多様な作物がとれる低地と交易や植民活動を行っていた。

アルティプラノはラクダ科動物の飼育に適した環境であり、先史 Tiwanaku 社会においても牧畜は肉利用、荷駄獣、獣毛生産などが行われ、重要な生業の一つであった。その為先史 Tiwanaku 社会において動物利用を考察することは社会の動態を考える上で意義がある。

先史 Tiwanaku 社会における動物をめぐるポリティカルエコノミーについては次のように考えることが出来る。Tiwanaku 国家において、人々は労働を行い、またラクダ科動物の肉や獣毛や労働としてのリャマキャラバンをトリビュートした。リャマキャラバンは低地で生産出来る作物をアルティプラノへと運んだ。その中で特に重要なものがエリートによるフィースティングの際に飲まれるチチャと原料のトウモロコシであり、それらはアルティプラノへと運ばれた。ラクダ科動物の若獣や獣毛は Tiwanaku 遺跡のそばに集められた。若獣は各部位に解体され、運びやすく肉の割合の多い四肢がアルティプラノの各共同体に再分配され、また肉はフィースティングにおいて人々に振舞われた。また、ラクダ科動物の獣毛は衣服にされた。そうして集められたものは人々の労働の見返りとして再分配され、またフィースティングにおいてそれらが振舞われた。

以上のように、社会の動態と動物利用の関係を考察するには、ポリティカルエコノミーの視点が重要である。そこで、本発表ではまず従来の先史 Tiwanaku 社会の動物骨の分析結果とアンデスのポリティカルエコノミーの議論それぞれについて整理する。そしてその上で先史 Tiwanaku 社会における動物利用について考察しながら、先史 Tiwanaku 社会における動物考古学研究の可能性について論じる。

民俗社会における自然観とコスモロジーの変容 —韓国全羅北道扶安郡蝟島を中心として—

宇田川 飛鳥 (慶応義塾大学)

本研究は儀礼のコスモロジーから民俗社会の自然観を明らかにするものである。自然観と宗教の関連を具体的事象から証明すること、自然環境問題において現地の自然観に目を向けることで可能な解釈を示すことが狙いである。研究対象地域とした韓国全羅北道扶安郡蝟島は、干潟という自然環境が漁撈技術のみでなく宗教的世界観にも反映されている民俗社会である。この蝟島で正月三日に行われる洞祭「蝟島ティベクツ(위도띠벙굿)」を事例として、この儀礼の世界観における空間と時間、行為から自然観を導くことを目指した。使用資料は韓国民俗学における過去の調査報告(河孝吉『蝟島の民俗—大里願堂祭篇—』1984 年、国立民俗博物館より出版など)ならびに 2005 年8月から 2006 年9月にかけて断続的に行った現地調査のデータである。

蝟島ティベクツは蝟島南東のデリマウルで世襲巫とマウルの成人男性を中心に陰暦1月3日に行われてきた。その目的はマウルの安泰、招福除厄、水死者供養、豊漁祈願である。地理的範囲はマウル全体およびマウル背後の山、マウル前の海岸であり、祭神は竜神をはじめ願堂マヌラ、山神様、将軍様、神霊様(ソンニム)、エギシなど海や山、魚を象徴する神々である。「蝟島ティベノリ」の名で知られ、1978 年には全国民俗競演大会で大統領賞を受賞し 1986 年には国定重要無形文化財に指定された。この儀礼ではマウルの居住域を取り囲む山で願堂クツ、海で竜王クツが行われ、居住域と山・海の間は境界域として認識されており、この境界域では農楽隊を中心に「主山回り」が行われる。境界域に配置されている「堂山」と呼ばれる大木、「竜王岩」と呼ばれる崖は儀礼の世界観において豊饒や生命力を象徴し、新年にこれら堂山や竜王岩を回るのは豊饒や生命力を得るためであり、境界域の外側(山・海)は非日常的な力の源と認識され、「主山回り」に見られる循環性が蝟島ティベクツの自然観の特徴であると言える。近年では世襲巫の断絶により島外の巫堂が主巫を務めたり、巫堂の撮影を目的とした島外の見物者の存在により儀礼の日程や形式が変更されたり今後の変化が注目される。

さらに蝟島の核廃棄物処分場申請・誘致問題(2003 年～2004 年)を対象とし、賛成派であった蝟島島民を批判した反対派の扶安郡内陸住民の反核運動をとりあげた。抗議運動の「三步一拝」からこの反核運動がキリスト教的世界観に大きく影響を受け、直線的上昇的自然観であることを明らかにし、蝟島の自然観と対比させ両者が全く異なる自然観であることを指摘した。本研究は宗教人類学を用いて明らかにした民俗社会のコスモロジーを、環境人類学の課題へ当てはめ現地社会の葛藤を解釈し、自然観と宗教の関連性を具体的事象から明らかにしたものである。

日本の会社における交換 —象徴と構造からみた年功賃金の研究—

立花 弘志 (成城大学)

本研究は、人類学的な交換論によって、日本の年功賃金が交換であり、その交換によって会社の文化が形成されていることを明らかにするとともに、交換論の理論的發展をめざすものである。本研究はレヴィ＝ストロースの構造主義の立場をとるが、そこにストラザーンの象徴論を接続し、「象徴と構造」の両面から交換にアプローチする。意識された世界は象徴によって理解され、無意識の領域は交換によって構造化されるという2階建ての仮説である。

年功賃金は敗戦の翌年1946年の電産闘争で成立した。以来、幾度となく年功賃金はもう終わるといわれたが、実際には連続しており、そこには意識と現実の乖離がみられる。年功賃金には、経済学では分析しきれない部分がある。

交換としての年功賃金は、2つの交換から成り立っている。ひとつは、「中心のない再分配」である。会社において社員が会社に給付するものは労働だけでなく、サービス残業、酒場での情報交換、接待、付き合いゴルフなど多岐にわたる。会社が社員に給付するものも賃金、諸手当、福利厚生、年中行事、成員権など幅広い。このように賃金と労働は経済的な対価の関係になく、全体化している。これは「恩と忠誠」の交換である。

この交換はシニフィアン・シニフィエ化(観念と物の一体化)し、全体性、強制力をもち、象徴により間接的に理解される。会社では正社員とパートは明確に区別され、境界の明確な共同体が形成される。会社には中心(首長)がなく、会社という集団が交換の一方の主体であり、権力をもつ。

第2は「世代間の贈与交換」である。経済学者、E. P. ラジアーは、年功賃金を若い間は産出高より少ない給料を受け取り、中年以降に埋め合わせる「会社に対する貸し借り」として理論化した。この説明を、時間軸を固定して空間軸でみると、年功賃金とは「世代間の贈与交換」となる。

この贈与交換は会社内に互酬的な平等をもたらし、同時に社員間に序列の関係性をつくる。戦後日本の経済成長を支えたメインバンク・システムや貯蓄行動にも、この交換と同じ構造が投影され、「資金循環の構造」がみられる。これは、「経済の脱経済化」である。

年功賃金が交換であることを確認するために、中根千枝の「タテ社会」、アベグレンの「日本的経営」、伊丹敬之、岩井克人らの著作をテキストとして分析した。それぞれの解釈は、交換による構造化を各人の視角からみた「異伝」である。

2つの交換は「上位統合—下位分解」の関係にあり、多層的に集団を構造化する。交換は言語に相同で、ラングとしての交換体系をもち、言語の外部にある。そして、交換は言語によって認識されず、象徴は(年功賃金の場合)認識の破れを補完する「世界像のツギあて」である。交換によって構造化された文化は、他の秩序と混じり合って現実を構成するが、「世界像のツギあて」によって、すべては一元的に理解される(象徴は恣意的で、交換を隠蔽する)。

キリスト教宣教／改宗の人類学的研究—東南アジア大陸部山地民を事例に

梅田 夕奈（東京大学）

本論は、キリスト教がその教勢を拡大すること、所謂「キリスト教化」という事象を人類学的にどう説明すればよいのかという問いに対し、先行研究の検討を通じてあるべき方向性を探る。そして、事例として東南アジア大陸部山地民のキリスト教改宗をとりあげ、従来の研究蓄積に対し、人類学的キリスト教化研究の文脈からの視角によって貢献することを目指す。なお、本論はすべて文献データに基づく。

キリスト教理解の典型としては第一に、「社会的地平の急速な拡大が、土着の宗教が供給する信仰よりも、より高度に合理化された信仰への必要を生んだために人びとは世界宗教であるキリスト教に改宗する」という見方が考えられよう。しかしこの見方は、「宗教とは世界の意味の問題に答えるものである」という宗教観を前提としており、あらかじめ改宗がどのようなものである(べき)か、現実の事象を見る前に定めてしまっているという問題がある。第二に、「キリスト教の土着化」や「キリスト教との接触による土着文化の変容」といった枠組みによる理解が考えられるが、これらの理論も「文化体系」という妥当性の疑わしい枠組みを前提としなければならない点で優れたものではない。一方、植民地化及びキリスト教化についての歴史人類学的研究は、宣教師と現地の人びととの接触と相互交渉を描いており、キリスト教宣教とはまずもって日常実践への介入であったこと、キリスト教改宗とは宣教師による介入を受けての日常実践の変容であったことを指摘している。本論はこの立場を肯定しつつ、同時に近年キリスト教化研究に広く受け入れられているキーワード「対話としての改宗」の含意をより深く活かすべく、日常実践への介入と変容である宣教／改宗は、宣教者にとっても改宗者にとっても、「現状どこにもないもの」へと向かっていくために帰結が予測できない対話である、という性質を指摘する。

東南アジア大陸部山地民のキリスト教改宗、特にカレンとアカのキリスト教改宗は、おそらくはこの地域では宣教師の強引な介入がなかったために宣教という面はさほど注目されて来なかったが、既に「日常実践としての変容」という枠組みでキリスト教改宗が描かれてきた。しかしそれら民族誌が山地民の日常実践の動態を描くことにおいて素晴らしい達成をしている一方で、そのキリスト教に対する見解は山地民、とりわけ伝統派(非キリスト教徒)の山地民に寄り添い過ぎているのではないかという指摘が可能である。これら先行研究は、何故北タイでキリスト教がそのような形をとることになったのか、なっているのか、という問いに十全には応えてくれない。そこで本論は、キリスト教改宗は、宣教師と現地の人びととの、具体的な場所での生活を焦点になされる「帰結のわからない対話」だという特性を、宣教師対現地の人びとという構図の描けない東南アジア大陸部山地民においても見出す方向性を探る。

日本における民芸と消費実践の人類学的研究

陳 景揚（東京大学）

今回の論文の目的は、物質文化の人類学的研究アプローチを用いて日本社会における「民芸」と呼ばれるモノの消費価値の創出と日本社会の社会経済的移り変わりの関係について把握することである。

従来のハンディクラフトやフォークアートの愛好に関する先行研究では、都市中間層が抱く、失われつつある前近代社会へのノスタルジアやエキゾチックな魅力と単純に結び付ける傾向がしばしば見られる。このような解釈に対して本論文は、民芸の消費者の主観的価値付けの過程を記述・分析し、日本社会における民芸の消費価値には、物質的合理性があることを指摘した。つまり民芸的なモノは、ノスタルジアの満足やエキゾチックな魅力を持つのみならず、ゆとりが出てきた都市中間層の美質的生活の象徴であり、また他の様式の芸術品と比べ、値段が比較的安くて、近代生活に適用できる道具としての価値があるといった魅力をも持つということである。こうした民芸の消費価値の創出は、柳宗悦の思想と民藝運動の影響だと考えられます。従って、日本の民芸運動を論ずる際に文化運動・工芸運動としての民藝運動を考えるのみならず、消費運動としての民藝運動にも注目するべきであると指摘した。

また、従来の研究では、民芸の消費者は一枚岩のような存在とされているが、本論文では、異なる民芸消費者による多様な意味づけの過程に注目した。具体的には、日本社会の民芸の消費者を、民藝運動の指導者、そして、指導者の指導を受け、柳の思想に関する知識を持つ「運動の仲間」、そして、柳の思想にあまり関心を持たない大衆の愛好家といった三つの消費者グループで分け、それぞれの消費実践の在り方を解明した。

民藝運動の指導者と運動の仲間グループは、大正・昭和初の大衆消費社会において登場したものだと考えられる。一方、大衆の愛好家の消費グループは主に戦後の高度経済成長期の消費社会の中で形成されてきたものだと考えられる。民藝運動の指導者にとって「民芸」は毎日に使う「生活道具」である。彼らの民芸消費は、廉価な機械製品への反発だと考えられるが、「使いこんだ美」に対する鑑賞により、彼らが主張する「自然の美」・「健康な美」とは、単なる自然や近代に汚染されてなかった過去へのノスタルジアと言うよりも、むしろ現在や未来を捉える消費実践と考えられる。運動の仲間の消費実践は、指導者の思想・好み・ライフスタイルに強く影響されていると考えられる。運動の仲間にとって「民芸」は「生活道具」であるが、これらのモノも指導者のファンとしてのマーカーだと考えられる。大衆の愛好家にとって「民芸」は「生活道具」のみならず、「骨董」・「お土産」・「郷土玩具」などのモノも含まれる。大衆愛好家の消費実践は観光の文脈で行われるのみならず、住まいの文脈で行われることもある。

「アジア家具」を「所有」する

—現代日本都市におけるモノの受容と「意味」形成プロセスに関する人類学的考察—

丹羽 朋子 (東京大学)

モノは使用価値や経済的価値を超える、文化的な意味をもつ。このことは、20 世紀後半以来の消費研究において中心議題とされてきたが、多くの場合、一般化された消費実践が対象とされ、モノは特定のカテゴリーや製品名を前提に扱われる点に問題がある。これに対して本研究は、「モノ」の〈物質性／マテリアリティ〉を分析の中心に据え、モノと人の多様で個別的な関係を読み解くための理論的な検討に取り組む。人類学的物質文化研究は 1980 年代以降、モノ自体に焦点を当て、そこから人や社会との相互関係にアプローチするという手法を見出した。本研究はこの動向に立脚しつつ、「モノの人類学」をその先へと進めるための基礎研究として位置付けられる。

事例には日本における「アジア家具」の受容過程を取り上げる。具体的には、東京のあるインテリアショップにおいて約10年間扱われてきたこれらの家具に対する、店舗や家での意味付けや使用に関わる行為を調査し、その意味や価値の変容過程を考察した。これらはインドネシアや中国等の、「伝統的」工法による天然素材を用いた家具類である。日本では「アジアニテイスト」等と呼ぶ形で 1990 年代後半から近年まで消費トレンドとなったが、この現象は従来、主に日本版オリエンタリズムといった観点から批判的に論じられてきた。

本研究の特徴は、特定の海外生産地からきたモノが日本で商品化され、さらに店舗という流通局面から家での個別的な所有局面へとモノが移動し、家での使用経験が蓄積されていく中で、「モノ」と人の個別の相互行為が繰り返され、結果的に多様な意味や価値が生成、あるいは変容していく過程を焦点化した点にある。そこで見出されたのは、単に記号的な「意味」の変化ではなく、実体や素材感、形といった個別の物質的特性をもったモノそれ自体と関わる人々の行為や経験の中で、モノの意味や用途、或いは形それ自体が、「見立て」られ、転用や流用されていくプロセスであった。

本論はこの事例分析及び先行する物質文化研究の検討を通して、個別の物質性をもつ「モノ」独自のシステム——例えば、人間の感覚世界に働きかけ、また〈住まう〉という経験の中でその使用や処分等の日々の行為が使い手になんらかの影響を及ぼす等——の多様なあり方を明らかにしていく。結論部では、「モノ」の意味や価値は、所有や使用を通して人と「モノ」が様々な相互交渉を蓄積する中で〈過程的〉に生成、変容するという観点から、テイストやスタイルの問題に取り組む意義を論じる。さらに今後の発展的視座として、このモノの意味やモノ自体をずらして「使いこなす」ことをある種の創造性を伴う「領有」行為と捉え、このプロセスにおける人とモノ、場所等の相互的なやりとりから促される、世界観や美意識、アイデンティティ等の「対象化」に眼を向けるという、物質文化研究の新たな方向性を示唆する。

風水システム論考

—香港と台湾における Fortunetelling としての風水の社会人類学的考察—

小林 宏至（首都大学東京）

風水という言葉の意味するものは非常に多様である。たとえばそれが山河の景色そのものを指す場合もあるし、住宅や墓地の設計に際して用いられる複雑な概念の場合もある。風水を社会科学の中で分析する上でたびたび用いられてきた概念は、「陰宅風水」および「陽宅風水」という概念であった。簡単に説明してしまえば、「陰宅風水」とは死者の「家」である墓地に関係する風水であり、「陽宅風水」とは生者の「家」である都市や村落、家屋などに関係する風水のことである。これらの概念は、風水が生活や政治または紛争といった様々な場面で表面化する際に、その多様性を説明する一つの分析概念として非常に有用であったといえる。しかし、本論文は風水の多様性を描こうとしたものではなく、風水を多元的なシステムとして描き出そうとするものである。

本論文は社会人類学における風水研究を時系列的に追いながら風水のシステムを論じているが、その議論は次の三点に集約することができる。第一点目に、社会人類学における風水研究を19世紀後半から現在まで追っていく中で、それぞれの時代における研究の布石となった成果をまとめ、風水の研究史の概観を提示した。さらにそれぞれの時代の社会状況下における風水観を様々な事例をもとに詳細に描き出すことで、風水観がいかにその置かれた社会状況に依存しているかを示すとともに、20世紀後半から断絶された大陸中国における風水研究の実態を描いた。第二点目に、Geometry としての風水と Fortunetelling としての風水という概念を提示し、それぞれの説明体系が意味するものが違うシステムであることを主張するとともに、大陸中国において風水がよりシステムティックに論じられる理由について、それが Geometry としての風水と Fortunetelling としての風水が同じ説明体系を有しているからだという議論を行った。そして、これまで社会人類学における風水研究史の中で何度も論じられてきた、香港と台湾における風水をめぐる論争を再び検討するなかで、双方の研究者の研究スタンスに論点を絞り1970～1980年代における社会人類学的な風水研究を Fortunetelling としての風水の議論として再考した。さらに第三点目に、これらの議論を踏まえた上で香港と台湾における風水に対する意識を新たな統計資料を用いることで再度議論し、「香港社会」における風水観が「台湾社会」における風水観とは異なり、祖先祭祀と相関的な関係をもたないことを明らかにし、また「香港社会」における風水観の変遷とその性格を描き出した。

本論文は地域社会ごとに多様性を見せる風水観を、Fortunetelling としての風水として考察することで「香港社会」と「台湾社会」における風水観の相違を改めて明示し、これまでの社会人類学における風水研究の補完的役割を担うものである。

ためらうことと、まきこまれること、そして意味をみいだすこと —「嫁」の立場から見る、現代沖縄社会における祖先崇拝—

吉田 佳世 (東京都立大学)

沖縄の祖先崇拝は、そこに暮らす人びとに「大切なもの」として認識されている事象である。それゆえに、年間を通してさまざまな祭祀があり、また、その祭祀集団の継承に高い関心が寄せられている。しかし、その一方で、祖先崇拝をめぐる人びとの悩みは後をたたない。たとえば、本発表の主題である「嫁」の立場にある女性たちは、祭祀の準備・運営などの実務負担を担い、かつ、次期継承者となる男児の出産を期待されるのが一般的である。そのため、彼女たちは、体力的・精神的に大きな負担を抱え、また、自分の人生選択や自由を拘束されることも少なくない。このような状況から、沖縄社会においては、男女問わず、従来通りの祭祀や継承に疑問を持ち、ネガティブな意見を言う人びとも多く散見される。そして、このネガティブな意識は、多様な価値観が諸個人に内面化されうる昨今、共有されたものになりつつある。しかし、沖縄の祖先崇拝は、今なお、脈々と受け継がれているのである。

本発表は、現代沖縄社会において、祖先崇拝に対するネガティブな意識が共有される一方で、どのようにして世帯や親族の間で祖先崇拝は継続していくのかを問いとし、「嫁」の立場にある女性たちの主観に焦点を当てながら、その主観が間主観的に構築されていく動態を探っていくことで答えを導き出そうとするものである。「嫁」に焦点をあてたのは、彼女たちが、実質的あるいは将来的に、祭祀を遂行する立場にあり、また、祭祀継承者確保の当事者であることに起因する。「嫁」の主観あるいは実践は、その負担が多い分、その集団の祭祀を体現し、次世代の継承を左右する事になる。それにもかかわらず、「嫁」、あるいは、彼女たちの主観は、先行研究においてほとんど注目されることはなかった。

ここでは、インターネット掲示板の書きこみから、「嫁」の立場にある女性たちがどのような悩みを抱えているか、あるいは、それに対しどのような応答がなされているかを分析する。そして、彼女たちの悩みの多くが、祖先崇拝を問題としているというよりも、特定の人物との関係を問題としていることを明らかにしたい。彼女たちは、その人物との関係確立という動機のもと、祖先崇拝にまきこまれていくのである。しかし、そのような動機からはじめられたとしても、彼女たちは、祖先崇拝を道徳的行為として認めているがゆえに、さまざまな他者との対話や出来事を通して、祖先崇拝に肯定的な意味をみいだす可能性を留保している。この諸個人の主観の揺らぎこそが、祖先崇拝を継続し次世代へと伝えていく要因であり、また、今なお祖先崇拝が、他者との対話や様々な出来事などの、諸個人の人生の傍に、鮮やかに息づいている証左と言えるだろう。

「セックス・ワーカー」と「風俗嬢」のはざまで —HIV 感染を含むリスクについての考察—

熊田 陽子 (東京都立大学)

HIV/AIDS 対策分野で使われる「セックス・ワーカー」(以下 SW)は、職業人としての働く権利というメッセージが込められたことばであり、その正当性は学術分野や社会運動においても確立されたように見える。しかし日本の性風俗従事者は自らを SW ではなく「風俗嬢」と称することが多く、その概念は彼女たちに共有されているとは思えない。ならば、政策決定等に働きかける公的な声であり性風俗業に影響を与える可能性がある重要なことばである SW がどこまで性風俗業従事者の声を表しているのかという問題意識を持って再考する必要があると言えよう。これまで HIV 感染予防のターゲットを明らかにする意図で行われた人類学的研究では、実際の(「売春」に近い)行為と言語化される「売春」の齟齬が発見され、「売春」に類似した行為をしていてもそれを自己認識しない(または言語化しない)人々に対する HIV 感染リスクが指摘されてきた。これは不可視な人々の存在を指摘したと同時に、社会的な蔑視を強く内面化する人ほど不可視になりやすいことを明らかにしたとも解釈できる。そこで日本を対象を絞った本論では、性風俗業に従事する女性がどのような蔑視を内面化するのかを明らかにするために、日本の否定的な「売春」観の歴史的考察を、戦後を中心に行った。その上で日本の文脈で主張される SW とは何かについて再考した。いわゆる売春擁護者によれば、SW は自発的で誇りを持った職業人であり HIV 感染リスクはむしろ「素人」よりも低い。SW は感染から身を守る術を知っており自主的に検査も行うからだ。ゆえに非難すべきは感染を防ぐ道具を使わない性行為に高い価値を見出す客と彼らを狙う店側であるという。だがプロとしての職業意識が高い SW ならばこうした事態にも毅然とした態度で対応することができるだろうが、本論では本当に性風俗従事者の感染リスクは低いのか、つまり皆がそうした SW であるのかという問いを立て、SW の定義からずれる人の HIV を含む性感染症のリスクについて検討した。この問いに答えるにあたり、SW の語りを風俗嬢に内面化された「売春」へのスティグマと、風俗業を通じた多様な経験との相互作用から生じる自己評価という側面から検討した結果、SW 像には当てはまらない性風俗従事者の姿が浮かんできた。これは「私の中の自分」のスティグマ化と、風俗業を通じた自尊心の回復の共存であった。つまり「主体的な SW」か「強制的・搾取的売春」かという二元論では、日本の性風俗業従事者を説明できないのである。その後 SW には当てはまらない「風俗嬢」の HIV 感染リスクを考察したが、それは性風俗業従事者全般が持つリスク要因——社会保障の欠如——の上に、非 SW であることによる諸要因——サポートの欠如、頻繁なリスク行為、風俗ネットワークからの疎外など——などが重なった、リスクの二重構造であると考えられた。

NGO による先住民アイデンティティを利用した脱周縁化の試み —マレーシア・サバ州の先住民社会を事例として—

竹村 有未 (上智大学)

本論文は、国民国家の中で周縁に位置づけられる人びとが、NGO を活動の舞台とし、国際社会と国民国家のはざままで創り出された「先住民民族」としてのアイデンティティを利用することで、自らの生活戦略に新たな活路を見出すことの可能性を考察したものである。具体的には、マレーシア・サバ州で先住民の生活の質的向上を目的に活動する NGO である Partners of Community Organisations (PACOS) を事例とし、先住民としてのアイデンティティを持ち合わせた人びとが、それを積極的に利用し、NGO を主体の拠り所としながら開発の恩恵をコミュニティにもたらすよう働きかけを行なうまでに至った過程および現在の状況を考察した。

サバ州は 1963 年にマレーシア連邦に加入することにより独立を果たしたが、国民統合の過程においてサバの先住民とされる人びとは周縁化されることとなった。その原因として、エスニック・グループの構成が複雑であり、近代化に伴う経済的恩恵を配分する仕組みが上手く構築されなかったことが挙げられる。また、国家における政治的な支配者集団と、州に絶えず流入してくる不法移民が宗教や言語など文化的特徴を共にするため、サバの先住民の人びとは、板ばさみにされる状態となっていた。その結果、国民の根幹であるマレー・イスラームの影響が強まることとなった。また、近代化や行政サービスの普及が進まないことから、サバの多くの農村での生活は困難なものにあり、貧困問題も浮上していた。

そのような状況のなかでサバが抱える問題を解決しようと、1980 年代前半にサバの先住民を中心とした大学進学を果たしたエリート層がクリスチャン運動を組織したのが、PACOS の始まりである。その後、運動を展開してゆくなかでメンバーの入れ替わりや、活動の指針をめぐる対立があり、1980 年代後半ごろになると衰退期を迎えることとなった。しかし、運動が停滞していた時期と東南アジアにおける先住民運動が活発であった時期が重なったため、先住民運動に影響され、クリスチャン運動から農村地域に暮らす人びとの生活の指摘向上を目指す NGO へと変容することとなった。

これまでならば、サバの先住民の人びとは、国民国家の中で周縁に位置づけられ、近代化や開発から取り残されてしまっていたが、PACOS が誕生し、国家以外の空間から開発をめぐる恩恵を獲得し、先住民社会の一部に配分する役割を担う団体として機能することとなった。現在では、国民国家と国際社会のはざままで創出された先住民アイデンティティを戦略的に利用しながら、サバの人びとが抱える問題を解決する一つ的手段として PACOS の活動が成立している。つまり、先住民としてのアイデンティティを積極的かつ戦略的に利用することで、主体を構築し自らの生活の質的向上に対しての取り組みが行なわれていると言える。

「軍艦島」の生活誌

井上 博登（早稲田大学）

本研究では、特異な環境下にあった「軍艦島」社会における独自の生活を、元住民へのインタビューを元に再構成することを試みている。その際、従来おこなわれてきた「軍艦島」の建築学的研究や、他地域の「炭鉱研究」を批判的に検討し、それぞれの視点に偏らない折衷的視点が有効であることを示した。また、近年の保存・活用運動が注目されているなかで、「軍艦島」を表象する際に、誰が、どのような立場から語っているのかが重要であることを示し、多様な「軍艦島」/端島像や語りの必要性を説いている。

調査は、2004～2006 年にかけて元端島在住者約 15 名へのインタビューという形でおこなった。本論では、「軍艦島」の生活を規定していたものとして、「詰所制度」における生活管理に着目したため、とくに詰所関係の職(外勤係・寮係員等)に就かれていたインフォーマントを取りあげている。

「詰所制度」とは、炭鉱社会に広くみられた管理システムである。「軍艦島」(端島炭鉱)では、島内に 2,3 カ所詰所があり、鉱員と会社をつなぐ窓口のような役割を果たしていた。鉱員は欠勤届や生活上の苦情・相談事等を持ち込み、詰所は鉱員の勤務状況から生活上の些細な情報までを把握していた。「詰所制度」の最大の目的は、生活管理によって従業員を勤勉にし、石炭の出稼率をあげることであった。

インタビューからは、「詰所制度」において従業員や寮生を監督する立場にある係員が、単に管理する側としてふるまうのではなく、個人的に創意工夫をこらしたり面倒をみてあげることによって、「管理される側」の人々との間に感情的な信頼関係や親近感を構築し、それがまた勤務状況・出稼率の向上に寄与していた側面が浮き彫りとなった。

考察としてはさらに歩を進め、上記のような状況があったにせよ、「詰所制度」がかつての納屋制度からの残滓を残している側面も考えられる以上、個人間の認識では捕捉できない「生活管理」の深層について言及した。

以下に結部を列記する。

- ・ 「軍艦島」では階層に応じた居住区および居住階の住み分けがおこなわれ、とくに垂直的差異／水平的結びつきという性格が強かった。ただし島内の生活状況は各種設備の設置等、時代によって相当異なり、「軍艦島」の生活を語るには細かい時代考証が必要である。
- ・ 従来の「炭鉱研究」であまり着目されることのなかった「詰所制度」に着目し、「軍艦島」という高密度居住空間において「詰所制度」がどのように生活に関わっていたのかをあきらかにした。今まで、正から負まで極端な「軍艦島」/端島像が語られてきたが、そのような状況に対し、細かい時代考証と語る者の立場にとくに留意することで、多様な表象が同時に共存できる可能性を示した。保存・活用を巡る動きが活発化し、「軍艦島」に注目が集まっている現在、排他的ではない多様な語りの重要性を主張することは意義あることである。

現代アートイベント考 — eND におけるアートイベント論 —
(The study of modern art event — The theory of art event for eND —)

前 文章 (Fumiaki Mae)

【 序章 】

研究対象を路上アーティストからアートイベントへと変更した理由と動機を述べた。次に、筆者自身が企画し開催しているアートイベント「eND (エンド)」を調査対象として取り上げたことに対する断り書きを述べたうえで、その着目理由と妥当性を論じた。

【 第 1 章 —アートイベントとは何か— 】

現在の日本におけるアートイベントを紹介し、それぞれのアートイベントの特徴を挙げた。具体的に「DESIGN・FESTA」、「GEISAI」、「高円寺『ハート・トゥ・アート』」、「HUOVA」、「レントゲン藝術研究所」を取り上げた。

【 第 2 章 —eND とは何か— 】

実際に使用しているイベント概要書類や企画書をもとに、表現アート系イベント集団 eND の実態を詳細に説明した。

【 第 3 章 —動機と問いかけ— 】

今回の調査をおこなうに至った動機や意義を記し、考察へと導く問いかけをおこなった。

【 第 4 章 —方法と報告— 】

何らかの形で eND に携わっている主催者・出演アーティスト・スタッフ関係者・イベント来場者の 4 者にインタビューを申し出、体験談や彼らの独自の世界観にもとづいた考えなどを聞いた。

- ▲ 総人数 : 48 名。
- ▲ 性別 : 男性=23 名。女性=25 名。
- ▲ 年齢 : 19 歳~57 歳 (平均年齢:24.8 歳)。
- ▲ 実施期間: 2002 年夏~2006 年冬。
- ▲ 調査方法: インタビュー形式での質疑応答。

【 第 5 章 —分類と分析— 】

インタビュー回答を質問項目ごとに分類整理し、主催者・出演アーティスト・スタッフ関係者・イベント来場者の 4 者それぞれの視点から分析と検証をおこなった。

【 第 6 章 —考察— 】

[-求め得るもの-]

eND に携わる 4 者それぞれの人物像から導き出した考察を述べた。出演アーティストやスタッフならびに来場者が、アートもしくはアートイベントに求めている事柄に変化が見受けられるのではないかとの仮説を論じた。

[-“場”としてのイベント-]

eND の参加者にとって、eND というアートイベントとは、芸術的意義や理想を追求した末に辿り着いた産物というよりも、むしろ、日常生活においては得ることの難しい人との出会いや繋がりといった“生”のリアリティや共同意識を求めるゆえのものであると説いた。

またアートイベントそのものが、参加者体験型の「ワークショップ的イベント」の性質を帯びていること、さらにはアートイベントにおけるアートというものが、あくまで他者との“出会いの手段としてのアート”でもありうると論じた。

[-text × context × field-]

アートイベントというものをテキスト論的に論じ、限定された新たな意味や価値認識がアートイベントという“field (=場)”によって付与されるのではないかという仮説を述べた。

【 終章 】

今回の調査研究にまつわる想いを述べたうえで、今後の研究テーマにおける筆者の方向性と展望を提示した。

看護という文化 —家族看護からみえてくるその問題性—

工藤 由美 (千葉大学)

本論文では、学問実践と職業実践によって構成される看護という領域に一つの文化が形成されていると考えられる点に着目し、その主要な文化表象を抽出するとともに、この文化の生成する問題性を認識論的観点から批判的に検討した。

看護文化を分析するにあたり、その形成のプロセスを3つの次元から考察した。第1は学問としての看護学の構築と知識生成の次元である。第2は看護文化が日々構築／再構築される日常実践の次元である。そして、第3は日々構築され、再構築される看護文化の現れとして、看護師の語りによって表象され、再生産されている価値観やメンタリティの次元である。本論文では主として第3の次元に着目し、フィールドワークを通して収集した、家族看護をめぐる看護師の語りの分析を行った。

看護文化をこうした3つの次元から考察する理由は、看護という領域に以下のような特徴がみられるからである。1つは、この領域においては学問実践と職業実践の間で明らかな分業が確立しており、知識は常に学問的研究によって生成され、この学問上で蓄積される知識が職業実践へ急速に流れ込み、適用されることによって職業実践が変化していくからである。2つ目は、看護師になるためには必ず基礎看護教育を受け、国家資格を取得するまでに一定の期間に共通のプロセスを経なければならないことである。そこでは、看護師になるために必要な知識、行動規範やメンタリティが繰り返し教え込まれる。3つ目は、看護師の不規則な勤務時間にある。この結果として、看護師は仕事以外の私生活で他の職種の人々との交流が少なくなるだけでなく、同じ勤務時間体制の看護師同士での接触が多くなり、そこで語られることの影響も強くなる。生活世界が相対的に狭く形成されやすく、その世界の中でしか通用しないような「当たり前さ」も少なくないからである。

家族看護をめぐる看護師の語りの分析には、クラインマンの語りの分析枠組みを援用した。そこから、しばしば語りの主題となるようないくつかの文化表象を抽出し、グッドが医学を文化として捉えるための基礎概念として使った、カッシーラーの「形成原理」の考え方を援用することで、看護文化の「形成原理」を描き出すことを試みた。

患者(対象)の見方は身体を中心に据えており、そのニーズに対応した技術を提供することが看護であると見なされているのと同様に、家族に対する見方も、家族の心理をニーズの一覧表、心理状態のラベル、身体症状等に置き換えて把握する傾向が目立っていた。こうした認識は、基礎看護教育を通して教え込まれる人間の見方を反映してもいるが、同時に看護師たちの語りに自然と口をついて出てくる点で、それぞれの看護師のなかにごく自然なものとして内面化され、彼女らの実践に形式的に作用する見方にもなっているといえる。本発表では、こうした看護師たちの語りからみえてくる看護文化を描き出してみたい。

現代日本における国際結婚に関する研究 — 日ロ家庭を事例として —

フドロシコワ エカテリーナ (放送大学)

第一章、来日外国人の統計データを分析し、今日の日本における外国人に対して状況を統計から検討する。外国人妻(ロシア人妻)の異文化適応に関心をもち、日本での生活適応問題に焦点をあてた。言葉(日本語)の問題や生活習慣、子育てについてのさまざまな問題をとり上げる。

第二章、現代日本の社会における国際結婚という現象に関わる日本においての文化・社会・経済的な背景とさまざまな社会的な状況などを論じる。日本人の(結婚についての)価値観や見方を調査する課題にして、日本人の「イエ」制度の存在と日本における国際結婚との関連性を明らかにすることを試みる。また、未婚の日本人によるさまざまなデータを考察する。若い日本人の声を注目し、「結婚」及び「家庭づくり」に関して日本人の意識の変化、例えば、結婚したくない、結婚できないと考えている人がいて、結局、現代日本の社会的な問題として日本の家族のリストラクチャリングについて述べる。現代の結婚観、とくに独身女性の結婚観に焦点をあてて、「若い女性が結婚を避ける」という言説から考えて、国際結婚に結びつけて考察する。

第三章、国際結婚の定義や日本における国際結婚の歴史について解説する。さまざまな調査の結果によって国際結婚に関する日本人の意識を検討する。本研究は、現代日本において国際結婚に関する法律上にあるさまざまな問題を調べようとする目的ではないが、実施した聞き取り調査の結果によると、研究事例のなかのいくつかの日のロ家庭のケースには、法律に関わる問題が少なくないことが分かる。例えば、親権について、ロシア人妻の知識不足ということは明らかに見えてくるのである。日本語が分からないロシア人妻は、日本人男性と結婚した場合、結婚に対しての基本的な知識が必要と理解するが、言葉の壁にぶつかり、自分自身は日本人男性の妻として、そして日本人家族の一員として権利や義務や地位さえを知る事ができず、不安を感じるというような様子が見られるのである。この章で、来日するロシア人女性の「プロフィール」を描く。

第四章、現代日本における国際結婚のルートについて検討する。日本の「嫁不足」の問題と日本の経済成長は背景として日本社会の国際化について述べる。前章に記述したロシア人妻のプロフィールに関する、いくつかの事例を通して具体的に分析する。日ロ結婚の問題点を取り上げる。どのような問題が生じているのかを整理して紹介する。

最後に、現在日本における国際結婚に関連して、ロシア人妻とフィリピン人妻を比較する。[アジアから来た花嫁]の場合を分析した文献を参考し、日ロ家庭の事例を通しつつ、外国人妻としてロシア人女性とフィリピン人女性の相違と相似を提示し、考察を加える。

現代日本の都市地域における新たな「睡眠環境」

鍛冶 恵 (放送大学)

私たちの睡眠環境には、安心や快適性が求められてきた。今日、多くの住まいには専用寝室も確立されている。しかし、睡眠に問題を抱えているという意識をもつ日本人は増加の一途をたどっている。厚生省(当時)委託の研究班が1995年に全国11箇所の総合病院に訪れる外来患者6,466人を対象に調べた結果、5人のうち1人に睡眠障害があり、10人に1人が長期の不眠に悩んでいるという。

天災を除けば、住環境において安全、快適がほぼ確保されつつある今日、この状況はかえって皮肉なことである。心地よく眠りさやかに目覚めるためには、現代人の生活環境においてどのようなことが求められるのか。あるいは、環境以外のどのような要素が必要とされているのか。本研究においては、「睡眠環境」をこれまで考えられてきた寝具や寝室の広さ、温熱環境、光環境、などから視点をずらし、「寝床周りに置かれたもの」に着目した。それらを含めた環境を広い意味での「睡眠環境」ととらえ研究対象とした。さらに、眠りに入る際の準備として、どのような工夫をしているか、どのようにして睡眠と覚醒の切り替えを行っているか、といった就寝時の行動調査も併せておこなうことによって、問題提起の答えを探った。

先行研究については、睡眠が脳の働きによって影響を受ける生理的活動であることは広く認識され、生理学や心理学領域における科学的な研究は盛んに行われている。さらに、近年では、睡眠障害による健康被害や社会的問題への認識から睡眠の臨床研究も盛んである。しかし、睡眠環境の整え方や、睡眠行動・睡眠習慣は、睡眠に対する考え方、価値観、社会環境の変化という文化的要因に影響される現象である。そう考えた時、社会環境の変化を受ける睡眠習慣、睡眠行動、睡眠環境を総合的に、文化的な視点にたって考える「睡眠文化研究」という研究領域そのものが確立されておらず、また、断片的にしか行われていないことを考えると、その意味において本研究に直結する先行研究は無いと言ってよいと考える。

また、これまでに先行する睡眠研究のほとんどは、実験室内で行われたものであるが、実際我々は、日々四季の温湿度変化、その他様々の影響を受ける非常に複雑な環境において寝起きしている。その意味で、本研究の目的は、実際に寝起きしている環境について調査するなかで、現代都市生活者の睡眠環境や睡眠習慣の実態把握を行い、睡眠文化の視点にたった研究を行うことが、本研究のいま一つの目的である。

トルコの風刺漫画に見る近代化と国民文化の形成 —漫画家の誕生とその役割—

横田 吉昭 (放送大学)

本研究は、トルコの事例から風刺漫画の変遷を分析することにより、近代化と文化の伝播・変容と形成の様相を探るものである。そこから非西欧社会の近代化とナショナリズム形成のあり方を分析するという観点の提示をめざすものである。

トルコ共和国では、風刺漫画は新聞・雑誌に多く掲載され、「国民的」芸術文化の一つとみなされている。「国民的」と認知される過程には、「ネーション・ステイト」トルコ共和国形成に関わるトルコ独自の近代化のあり方が影響していた。

ベネディクト・アンダーソンは著書「想像の共同体」の中で、「ネーション・ステイト」形成への言語・出版資本主義の役割について言及した。トルコにおける風刺漫画の展開もメディアを通じ言語・出版資本主義に深く関わっており、「ネーション・ステイト」共和国建設と「トルコ国民」創生という共同体形成に伴う近代化の影響が看取できる。

風刺漫画は、まず西欧近代社会の発達の中主にイギリスとフランスで、新聞・雑誌のメディアとともに展開した。西欧における風刺漫画は、圧力的権力者など明確な風刺対象が減りメディアを享受する層が広がるとともに、政治的題材への風刺性が強いものから、一般的社会・生活の平明な描写や風俗的女性表象等に多様化・大衆化していった。

トルコ共和国の前身オスマン帝国は、その末期に西洋化・近代化を図り西欧文化・諸制度を導入、19 世紀中葉に新聞・雑誌とともに風刺漫画を受容した。その前史を持たない帝国では風刺漫画は、西欧を「正統」とする文化分野として、識字エリート層が主導・享受するものだった。19 世紀末のスルタン専制時代と、20 世紀初頭に對外問題が深刻化し政治が混乱した時期には、明確な風刺対象があったため、風刺漫画は西欧における政治風刺スタイルを定着させる形で発達した。

近代化に伴う風刺漫画の大転換は、第一次大戦後 1923 年のトルコ共和国建国以降起こった。初代大統領アタテュルクの政権は、言語による民族主義の下「国民」創生をめざし、西洋文化の普及と脱イスラムという近代化を強力に進めた。風刺漫画はアタテュルクに対する批判が困難であったため、西洋的女性表象と、キャラクターによる一般的社会・生活描写へと展開した。

これらは、一見西欧における大衆化と相似の展開であった。しかし現実と乖離した女性図像は、西洋化の象徴として表象された。またキャラクターによる漫画は、創生された「トルコ国民」を描写し、トルコ独自のスタイルを確立した「国民文化」として称揚されることとなった。風刺漫画は、民族主義に基づくトルコ共和国形成に独自の役割をも担ったのである。

このトルコの事例から、非西欧社会における風刺漫画の展開の様相を探ることにより、その社会の近代化とナショナリズム形成のあり方を分析するという観点を示せるのである。

ヒマラヤ山麓キランティ諸族の靈性をめぐる民族誌の試み

中上 淳貴 (中央大学)

南アジア史・インド思想史において、非アーリア系の民族の果たした役割が徐々に注目を集めている。インド平原へとアーリア人がもたらした形而上学的・観念的な思考様式が、時代をへて「大伝統」と呼ばれるインド哲学諸学派、バラモン、ヒンドゥー教、仏教などへと展開されるなかで、先住民民族である自然・精霊崇拜など「小伝統」と呼ばれる様々な宗教形態が果たした役割が省みられ、それら宗教伝統がになう基層文化としての性格が、南アジア地域の社会・文化研究に不可欠なものとの認識が深まりつつある。彼ら独自の儀礼的・神話的慣習は、ヒンドゥー教、仏教、また外来宗教との影響関係によって形成されたものではあるが、彼ら先住民に固有の世界観や死生観についての研究は、現在でも発展段階にあるといえる。

本研究は、東ネパール、インド北東部シッキム州周辺など東部ヒマラヤの山村地帯にすむキランティ諸族(リンブー族、ライ族など)と呼ばれる人々の、超自然的存在や死者との交渉の現場に立ち会うことを通じて、彼らの靈性をめぐる現実を民族誌として描きつつ、併せてその歴史性と人類学的視角のもつ連続性に対して一貫した視点に立つことで開示される可能性について、検討することを目的とした。現地での調査は、主に2001、2004-06年に西シッキム、ダージリン近郊、カトマンДУで行われたものである。調査の過程において私は彼ら固有の世界観を示すムンドゥムと呼ばれる口承伝統に出会い、それらに纏わる諸儀礼の観察をすることが出来た。その観察に基づいて、彼らが歴史を超えて継承した基層文化の形態を「キランティの靈性」として仮説的に取り上げ、その可能性について考察したのがこの論文の特徴である。

序論では、調査・研究の経緯、及び方法について概説した。第一章では、キランティの生成をめぐる歴史的変遷について三つのイメージを設定し、その変化と背景について考察した。これを踏まえて第二章では、そうしたイメージの連続性を受け継ぐキランティ諸族のリンブー族、ライ族の神話や儀礼及びその周辺に関しての先行研究について概説し、キランティの靈性とその現在についてのフィールド調査の報告を行った。第三章では、キランティ諸族にみられる「聖なる旅 ritual journey」について報告し、ライ族の儀礼歌やリンブー族の最も重要な儀礼の一つであるトンシン儀礼にみられるムンドゥムの諸特徴について、分析を行った。このような考察の中で、キランティの人々は、ムンドゥムを媒介として自己確認を行うことで、大伝統の宗教世界との距離を保ちながらも固有の世界観を持続してきたということが出来る。

本研究は、先史時代より継承された宗教伝統のいわば通層低音をヒマラヤ少数民族(キランティ諸族)の伝統社会をとおして聞き取り、南アジア地域のアルカイックな信仰に関する研究の可能性について検討した一つの「民族誌」の試みである。

INDONESIAN WORKERS in JAPAN: A Social Profile and Study of Survival Strategy

Eko Sasongko Priyadi (Sophia University)

In this paper, I would like to describe on the social profile of Indonesian workers in Japan, which is divided into two types, documented workers and undocumented workers. The documented workers are Indonesians who came to Japan to “work” with valid documents. I focused on Indonesians who have been dispatched by the IMM-Japan as “trainees” to represent documented workers.

Another category of workers, I called undocumented workers. I used the term of undocumented workers to categorize Indonesians who work “*illegally*” without being supported by required documents. On many papers, terms such as “*irregular workers*”, “*unregistered workers*” are used to discuss workers who work *illegally*. I would like to be more polite and softer term, with using undocumented concept.

In order to survive and getting “success” in Japan for several years, both the “trainees” and the undocumented workers adopt several strategies. Several strategies, which were created both workers, are building social network, working overtime, starting small business, building mutual trust, mutual assistant and growing solidarity spirit among them.

Even though both workers create several strategies, basically, the purposes of both are different. The undocumented workers created survival strategies to avoid investigation by the Immigration Bureau and the Japan Police regarding their status as *illegal*. While, the documented workers had to make strategies to increase their monthly wages in order to able send money to their family in Indonesia.

Although they came to Japan as “menial” laborers, both workers have “assisted” two countries both for Indonesia as sending country and for Japan as receiving country. For Indonesia, their decision to “work” abroad could assist the Indonesian government to decrease the number of the jobless. For the Japanese government, the both workers kept the small and medium-size Japanese companies from lack of cheap laborers, menial workers and avoid many of small and medium-size companies from collapse and bankruptcies.

沖縄県竹富島における観光の人類学的考察

加藤太一（成城大学）

本論文は、観光地におけるホストの個人的な日常生活実践に焦点をあてることによって、ホスト・ゲスト間における力関係の不均衡を隠蔽することなく、弱者としてのホストの主体性をいかに語りうるのかを示すものである。そのために、松田素二がポストコロニアル状況における、被支配者の抵抗を分析する際に用いた「ハードな抵抗」と「ソフトな抵抗」という概念を、沖縄県竹富島におけるホストの実践の分析に用いる。そして、ハードな抵抗のもたらす負の側面を指摘するとともに、ソフトな抵抗を評価することによって、弱者の主体性を語りうることを主張したい。

本論文で指摘するハードな抵抗とは、近代以降、外部の知識人によって発見された「創られた伝統」としての赤瓦の町並みを自らの文化として保存することによって、観光産業における住民の主体性を確立し、観光客に見せることによって、アイデンティティの拠り所としている実践である。しかし、本論文ではこうしたハードな抵抗を賞賛することによって、つまり、明確に境界づけられた「固有の場」を意識したホストの主体性を賞賛することによって、逆にホスト・ゲスト間の権力構造が見えなくなってしまうこと、更にはハードな抵抗が島内の住民に対しても、ハードな権力として現れることによって、新たな権力構造を創り出すことを明らかにする。

一方、「ソフトな抵抗」とは、日常的で個人的な生活実践であり、観光地としての竹富島においては、微細な実践でしかない。しかし、こうした個人的な生活実践は、微細な実践であるがゆえに、観光客が抱いてきたイメージの転換をもたらすことを可能にし、ホスト・ゲスト間の力関係の不均衡を解体するきっかけを含んでいる。また、ハードな抵抗のように、明確に境界づけられた「固有の場」をもたないがゆえに、常にゲスト側の土俵に立たされており、権力構造を見えないものにすることはできない。

また、これまでの竹富島に関する研究においては、日常では赤瓦の町並み、非日常では祭りをアイデンティティの拠り所とする一枚岩の島民が語られてきた。しかしソフトな抵抗を行う住民は、「創られた伝統」としての赤瓦の町並みではなく、日常では自らの生活実践を、非日常では「慣習」としての祭りを島民としてのアイデンティティの拠り所としており、一枚岩の島民のアイデンティティを日常と非日常の間で切断し、自らの都合の良いように使い分けることによって、ソフトな抵抗である日常的な生活実践を可能にしている。そして、本論文は「創られた伝統」と「慣習」を、その前提となる共同体の想像のスタイルによって明確に区別することが可能であり、「慣習」がもつ力をノスタルジックに語ることなく評価することも意図している。